

花のき村と盗人たち

新美南吉

青空文庫

むかし、花のき村に、五人組の盗人がやって来ました。

それは、若竹が、あちこちの空に、かぼそく、ういういしい緑色の芽をのぼして
 いる初夏のひるで、松林では松蟬が、ジイジイと鳴いていました。

盗人たちは、北から川に沿ってやって来ました。花のき村の入り口のあたりは、すか
 んぼやうまごやしの生えた緑の野原で、子供や牛が遊んでおりました。これだけを見ても、
 この村が平和な村であることが、盗人たちにはわかりました。そして、こんな村には、
 お金やいい着物を持った家があるに違いないと、もう喜んだのでありました。

川は藪の下を流れ、そこにかかっている一つの水車をゴトンゴトンとまわして、村の
 奥深くはいつていききました。

藪のところまで来ると、盗人のうちのかしらが、いいました。

「それでは、わしはこの藪のかげで待つているから、おまえらは、村のなかへはいつてい
 つて様子を見て来い。なにぶん、おまえらは盗人になったばかりだから、へまをしない

ように氣きをつけるんだぞ。金かねのありそうな家いえを見たら、その家いえのどの窓まどがやぶれそうか、その家いえに犬いぬがいるかどうか、よつくしらべるのだぞ。いいか釜右工門かまえもん。」

「へえ。」

と釜右工門かまえもんが答こたえました。これは昨日きのうまで旅たびあるきの釜師かましで、釜かまや茶釜ちやがまをつくっていたのでありました。

「いいか、海老之丞えびのじょう。」

「へえ。」

と海老之丞えびのじょうが答こたえました。これは昨日きのうまで錠前屋じょうまえやで、家々いえいえの倉くらや長持ながもちなどの錠じょうをつくっていたのでありました。

「いいか角兵工かくべえ。」

「へえ。」

とまだ少しょう年ねんの角兵工かくべえが答こたえました。これは越後えちごから来た角兵工かくべえ獅子ししで、昨日きのうまでは、家々いえいえの闕しきいの外そとで、逆立さかだちしたり、とんぼがえりをうったりして、一文もん二文もんの銭ぜにを貰もらっていたのでありました。

「いいか匏太郎かんなたろう。」

「へえ。」

と鉤太郎が答えました。これは、江戸から来た大工の息子で、昨日までは諸国のお寺や神社の門などのつくりを見て廻り、大工の修業していたのでありました。

「さあ、みんな、いけ。わしは親方だから、ここで一服すいながらまっている。」

そこで盗人の弟子たちが、釜右工門は釜師のふりをし、海老之丞は錠前屋のふりをし、角兵衛は獅子まいのように笛をヒヤラヒヤラ鳴らし、鉤太郎は大工のふりをし、花のき村にはいりこんでいきました。

かしらは弟子どもがいつてしまうと、どつかと川ばたの草の上に腰をおろし、弟子どもに話したとおり、たばこをスツパ、スツパとすいながら、盗人のような顔つきをしていました。これは、ずっとまえから火つけや盗人をして来たほんとうの盗人でありました。

「わしも昨日までは、ひとりぼっちの盗人であつたが、今日は、はじめて盗人の親方というものになってしまった。だが、親方になって見ると、これはなかなかいいんだわい。仕事は弟子どもがして来てくれるから、こうして寝ころんで待つておればいわけである。」

とかしらは、することがないので、そんなつまらないひとりごとをいつてみたりしていました。

やがて弟子の釜右工門が戻って来ました。

「おかしら、おかしら。」

かしらは、ぴよこんとあざみの花のそばから体を起こしました。

「えいくそツ、びつくりした。おかしらなどと呼ぶんじゃねえ、魚の頭のように聞こえるじゃねえか。ただかしらといえ。」

盗人になりたての弟子は、

「まことに相済みません。」

とあやまりました。

「どうだ、村の中の様子は。」

とかしらがききました。

「へえ、すばらしいですよ、かしら。ありました、ありました。」

「何が。」

「大きい家がありましたね、その飯炊き釜は、まず三斗ぐらいは炊ける大釜でした。」

あれはえらい銭になります。それから、お寺に吊つてあつた鐘も、なかなか大きなもので、あれをつぶせば、まず茶釜が五十はできます。なあに、あつしの眼に狂いはありません。嘘だと思ふなら、あつしが造つて見せましょう。」

「馬鹿馬鹿しいことに威張るのはやめろ。」
 とかしらは弟子を叱りつけました。

「きさまは、まだ釜師根性がぬけんからだめだ。そんな飯炊き釜や吊り鐘などばかり見てくるやつがあるか。それに何だ、その手に持つてゐる、穴のあいた鍋は。」

「へえ、これは、その、或る家の前を通りますと、槇の木の生け垣にこれがかけて干してありました。見るとこの、尻に穴があいていたのです。それを見たら、じぶんが盗人であることをつい忘れてしまつて、この鍋、二十文でなおしましょう、とそこのおかみさんにいつてしまつたのです。」

「何というまぬけだ。じぶんのしょうばいは盗人だということをしつかり肚にいれておらんから、そんなことだ。」

と、かしらはかしららしく、弟子に教えました。そして、
 「もういつペン、村にもぐりこんで、しつかり見なおして来い。」

と命めいじました。釜右工門かまえもんは、穴あなのあいた鍋なべをぶらんぶらんとふりながら、また村むらにはいつていきました。

こんどは海老之丞えびのじょうがもどつて来きました。

「かしら、この村むらはこりやだめですね。」

と海老之丞えびのじょうは力ちからなくいいました。

「どうして。」

「どの倉くらにも、錠じょうらしい錠じょうは、ついておりません。子供こどもでもねじきれそうな錠じょうが、ついておるだけです。あれじゃ、こつちのしょうばいになりません。」

「こつちのしょうばいというのは何なんだ。」

「へえ、……錠じょう前まえ……屋や。」

「きさまもまだ根こん性じょうがかわつておらんツ。」

とかしらはどなりつけました。

「へえ、相あいすみません。」

「そういう村むらこそ、こつちのしょうばいになるじゃないかツ。倉くらがあつて、子供こどもでもねじきれそうな錠じょうしかついでおらんというほど、こつちのしょうばいに都合つごうのよいことがある

か。まぬけめが。もういつペン、見なおして来い。」

「なるほどね。こういう村こそしようばいになるのですね。」

と海老之丞は、感心しながら、また村にはいつていききました。

次にかえつて来たのは、少年の角兵衛でありました。角兵衛は、笛を吹きながら来たので、まだ藪の向こうで姿の見えないうちから、わかりました。

「いつまで、ヒヤラヒヤラと鳴らしておるのか。盗人はなるべく音をたてぬようにしておるものだ。」

とかしらは叱りました。角兵衛は吹くのをやめました。

「それで、きさまは何を見て来たのか。」

「川についてどんどん行きましたら、花菖蒲を庭いちめんに咲かせた小さい家がありました。」

「うん、それから？」

「その家の軒下に、頭の毛も眉毛もあごひげもまつしろな爺さんがいました。」

「うん、その爺さんが、小判のはいった壺でも縁の下に隠していそうな様子だったか。」

「そのお爺さんが竹笛を吹いておりました。ちよつとした、つまらない竹笛だが、と

でもええ音がしておりました。あんな、不思議に美しい音ははじめてききました。おれがききとれていたら、爺さんはここにこしながら、三つ長い曲をきかしてくれました。おれは、お礼に、とんぼがえりを七へん、つづけざまにやって見せました。」

「やれやれだ。それから?」

「おれが、その笛はいい笛だといったら、笛竹の生えている竹藪を教えてくださいました。その竹で作った笛だそうです。それで、お爺さんの教えてくれた竹藪へいって見ました。ほんとうにええ笛竹が、何百すじも、すいすいと生えておりました。」

「昔、竹の中から、金の光がさしたという話があるが、どうだ、小判でも落ちていたか。」

「それから、また川をどんどんくだつていくと小さい尼寺がありました。そこで花の撓がありまして。お庭にいっぱい人がいて、おれの笛くらいのお釈迦さまに、あま茶の湯をかけておりました。おれもいっぱいかけて、それからいっぱい飲ましてもらつて来ました。茶わんがあるならかしらにも持つて来てあげましたのに。」

「やれやれ、何という罪のねえ盗人だ。そういう人ごみの中では、人のふところや袂に気をつけるものだ。とんまめが、もういっぺんきさまもやりなおして来い。その笛はこへ置いていけ。」

角兵卫は叱られて、笛を草の中へおき、また村にはいつていききました。

おしまいには帰って来たのは鮑太郎でした。

「きさまも、ろくなものは見て来なかつたろう。」

と、きかないさきから、かしらがいいました。

「いや、金持ちがありました、金持ちが。」

と鮑太郎は声はずませでいいました。金持ちときいて、かしらはにこにこしました。

「おお、金持ちか。」

「金持ちです、金持ちです。すばらしいりっぱな家でした。」

「うむ。」

「その座敷の天井と来たたら、さつま杉の一枚板なんで、こんなのを見たら、うちの

親父はどんなに喜ぶかも知れない、と思つて、あつしは見とれていました。」

「へつ、面白くもねえ。それで、その天井井をはずしてでも来る気かい。」

鮑太郎は、じぶんが盗人の弟子であつたことを思い出しました。盗人の弟子とし

ては、あまり気が利かなかつたことがわかり、鮑太郎はバツのわるい顔をしてうつむい

てしまいました。

そこで鮑太郎も、もういちどやりなおしに村にはいつていきました。

「やれやれだ。」

と、ひとりになったかしらは、草の中へ仰向けにひっくりかえっていいました。

「盗人のかしらというのもあんがい楽なしようばいではないて。」

二

とつぜん、

「ぬすとだツ。」

「ぬすとだツ。」

「そら、やつちまえツ。」

という、おおぜいの子供の声がしました。子供の声でも、こういうことを聞いている、盗人としてびつくりしないわけにはいかなないので、かしらはひよこんと跳びあがりました。そして、川にとびこんで向こう岸へ逃げようか、藪の中にもぐりこんで、姿をくらませるか、と、とつきのあいだに考えたのであります。

しかし子供達は、縄切れや、おもちゃの十手をふりまわしながら、あちらへ走つていききました。子供達は盗人ごっこをしていたのでした。

「なんだ、子供達の遊びごっこか。」

とかしらは張り合いがぬけていいました。

「遊びごとにしても、盗人ごっこはよくない遊びだ。いまどきの子供はろくなことをしなくなつた。あれじや、さきが思いやられる。」

じぶんが盗人のくせに、かしらはそんなひとりごとをいいながら、また草の中にねころがろうとしたのでありました。そのときうしろから、

「おじさん。」

と声をかけられました。ふりかえつて見ると、七歳ぐらいの、かわいらしい男の子が牛の仔をつれて立っていました。顔だちの品のいいところや、手足の白いところを見ると、百やくしようの子供とは思われません。旦那衆の坊つちやんが、下男について野あそびに来て、姓の子供とは思われません。旦那衆の坊つちやんが、下男について野あそびに来て、下男にせがんで仔牛を持たせてもらったのかも知れませんが、だがおかしいのは、遠くへでもいく人のように、白い小さい足に、小さい草鞋をはいていることでした。

「この牛、持つていてね。」

かしらが何もいわないさきに、子供はそういつて、ついとそばに来て、赤い手綱をかしらの手にあずけました。

かしらはそこで、何かいおうとして口をもぐもぐやりましたが、まだいい出さないうちに子供は、あちらの子供たちのあとを追つて走つていつてしまいました。あの子供たちの仲間になるために、この草鞋をはいた子供はあとをも見ずにいつてしまいました。

ぼけんとしてゐるあいだに牛の仔を持たされてしまったかしらは、くつくつと笑いながら牛の仔を見ました。

たいてい牛の仔というものは、そこらをぴよんぴよんはねまわつて、持つてゐるのがやつかいなものですが、この牛の仔はまたたいそうおとなしく、ぬれたうるんだ大きな眼をしばたたきながら、かしらのそばに無心に立つてゐるのでした。

「くつくつくつ。」

とかしらは、笑いが腹の中からこみあげてくるのが、とまりませんでした。

「これで弟子たちに自慢ができるて。きさまたちが馬鹿づらさげて、村の中をあるいてゐるあいだに、わしはもう牛の仔をいつびき盗んだ、といつて。」

そしてまた、くつくつくつと笑いました。あんまり笑つたので、こんどは涙が出て来ま

した。

「ああ、おかしい。あんまり笑つたんで涙が出て来やがった。」

ところが、その涙が、流れて流れてとまらないのでありました。

「いや、はや、これはどうしたことだい、わしが涙を流すなんて、これじゃ、まるで泣いてるのと同じじゃないか。」

そうです。ほんとうに、盗人のかしらは泣いていたのであります。——かしらは嬉しかったのです。じぶんは今まで、人から冷たい眼でばかり見られて来ました。じぶんが通ると、人々はそら変なやつが来たといわんばかりに、窓をしめたり、すだれをおろしたりしました。じぶんが声をかけると、笑いながら話しあっていた人たちも、きゆうに仕事のことを思い出したように向こうをむいてしまうのであります。池の面にうかんでいる鯉でさえも、じぶんが岸に立つと、がぼつと体をひるがえしてしずんでいくのであります。あるとき猿廻しの背中に負われている猿に、柿の実をくれてやったら、一口もたべずに地べたにすててしまいました。みんながじぶんを嫌っていたのです。みんながじぶんを信用してはくれなかつたのです。ところが、この草鞋をはいた子供は、盗人であるじぶんに牛の仔をあずけてくれました。じぶんをいい人間であると思ってくれたので

した。またこの仔牛も、じぶんをちつともいやがらず、おとなしくしております。じぶんが母牛でもあるかのように、そばにすりよっています。子供も仔牛も、じぶんを信用しているのです。こんなことは、盗人のじぶんには、はじめのことではありません。人に信用されるといふのは、何といううれしいことでありましょう。……

そこで、かしらはいま、美しい心になつていたのであります。子供のころにはそういう心になつたことがありましたが、あれから長い間、わるい汚い心でずっといたのです。久しぶりでかしらは美しい心になりました。これはちようど、垢まみれの汚い着物を、きゆうに晴れ着にきせかえられたように、奇妙なぐあいでありました。

——かしらの眼から涙が流れてとまらないのはそういうわけなのでした。

やがて夕方になりました。松蟬は鳴きやみました。村からは白い夕もやがひつそりと流れだして、野の上にひろがっていききました。子供たちは遠くへいき、「もういいかい。」「まあだだよ。」という声が、ほかのものの音とまじりあつて、ききわけにくくなりました。

かしらは、もうあの子供が帰つて来るじぶんだと思つて待つていました。あの子供が来たら、「おいしよ。」と、盗人と思われぬよう、こころよく仔牛をかえしてやろう、と

かんが
考えていました。

だが、子供たちの声は、村の中へ消えていってしまいました。草鞋の子供は帰って来ませんでした。村の上にかかっていた月が、かがみ職人の磨いたばかりの鏡のように、ひかりはじめました。あちらの森でふくろうが、二声ずつくぎって鳴きはじめました。仔牛はお腹がすいて来たのか、からだをかしらにすりよせました。

「だって、しようがねえよ。わしからは乳は出ねえよ。」
そういつてかしらは、仔牛のぶちの背中をなでていました。まだ眼から涙が出ていました。

そこへ四人の弟子がいつしよに帰って来ました。

三

「かしら、ただいま戻りました。おや、この仔牛はどうしたのですか。ははア、やつぱりかしらはただの盗人じゃない。おれたちが村を探りにいつていたあいだに、もうひと仕事しちゃったのだね。」

釜右工門が仔牛を見ていいました。かしらは涙にぬれた顔を見られまいとして横をむいたまま、

「うむ、そういつてきさまたちに自慢しようと思つていたんだが、じつはそうじゃねえのだ。これにはわけがあるのだ。」

といいました。

「おや、かしら、涙……じやございませんか。」

と海老之丞が声を落としてききました。

「この、涙てものは、出はじめると出るもんだな。」

といつて、かしらは袖で眼をこすりました。

「かしら、喜んで下せえ、こんどこそは、おれたち四人、しつかり盗人根性になつて探つて参りました。釜右工門は金の茶釜のある家を五軒見とどけますし、海老之丞は、五つの土蔵の錠をよくしらべて、曲がつた釘一本であけられることをたしかめますし、大工のあツしは、この鋸で難なく切れる家尻を五つ見て来ましたし、角兵エは角兵エでまた、足駄ばきで跳び越えられる堀を五つ見て来ました。かしら、おれたちはほめて頂きとうございます。」

と鉋太郎が意気こんでいました。しかしかしらは、それに答えないうで、

「わしはこの仔牛をあずけられたのだ。ところが、いまだに、取りに來ないので弱つてい
るところだ。すまねえが、おまえら、手わけして、預けていった子供を探してくれねえか
。」

「かしら、あずかった仔牛をかえすのですか。」

と釜右エ門が、のみこめないような顔でいました。

「そうだ。」

「盗人でもそんなことをするのでござえますか。」

「それにはわけがあるのだ。これだけはかえすのだ。」

「かしら、もつとしつかり盗人根性になって下せえよ。」

と鉋太郎がいました。

かしらは苦笑いしながら、弟子たちにわけをこまかく話してきかせました。わけをき
いて見れば、みんなにはかしらの心持ちがよくわかりました。

そこで弟子たちは、こんどは子供をさがしに行くことになりました。

「草鞋をはいた、かわいらしい、七つぐれえの男坊主なんですね。」

とねんをおして、四人の弟子は散つていきました。かしらも、もうじつとしておれなくて、仔牛をひきながら、さがしにいきました。

月のあかりに、野茨とうつぎの白い花がほのかに見えている村の夜を、五人の大人の盗人が、一匹の仔牛をひきながら、子供をさがして歩いていくのでありました。

かくれんぼのつづきで、まだあの子供がどこにかくれているかも知れないというので、盗人たちは、みみずの鳴いている辻堂の縁の下や柿の木の上や、物置の中や、いい匂いのする蜜柑の木のかげを探してみたのでした。人にきいてもみたのでした。

しかし、ついにあの子供は見あたりませんでした。百姓達は提燈に火を入れて来て、仔牛をてらして見たのですが、こんな仔牛はこの辺りでは見たことがないというのでした。

「かしら、こりや夜つびて探してもむだらしい、もう止しましょう。」
と海老之丞がくたびれたように、道ばたの石に腰をおろしていいました。

「いや、どうしても探し出して、あの子供にかえしたいのだ。」
とかしらはききませんでした。

「もう、てだてがありませんよ。ただひとつ残っているてだては、村役人のところへ訴

えることだが、かしらもまさかあそこへは行きたくないでしょう。」
 と釜右エ門がいました。村役人というのは、いまでいえば駐在巡査のようなものであります。

「うむ、そうか。」

とかしらは考えこみました。そしてしばらく仔牛の頭をなでていましたが、やがて、

「じゃ、そこへ行こう。」

といいました。そしてもう歩きだしました。弟子たちはびっくりしましたが、ついていくよりしかたがありませんでした。

たずねて村役人の家へいくと、あらわれたのは、鼻の先に落ちかかるように眼鏡をか
 けた老人でしたので、盗人たちはまず安心しました。これなら、いざというときに、
 つきとばして逃げてしまえばいいと思つたからであります。

かしらが、子供のことを話して、

「わしら、その子供を見失つて困つております。」

といいました。

老人は五人の顔を見まわして、

「いつこう、このあたりで見受けぬ人ばかりだが、どちらから参った。とききました。」

「わしら、江戸から西の方へいくものです。」

「まさか盗人ではあるまいの。」

「いや、とんでもない。わしらはみな旅の職人です。釜師や大工や錠前屋などです。」

とかしらはあわてていいました。

「うむ、いや、変なことをいってすまなかつた。お前達は盗人ではない。盗人が物をかえすわけがないので。盗人なら、物をあずかれば、これさいわいとくすねていってしまうはずだ。いや、せつかくよい心で、そうして届けに来たのを、変なことを申してすまなかつた。いや、わしは役目から、人を疑うくせになつて居るのじゃ。人を見さえすれば、こいつ、かたりじやないか、すりじやないかと思ふようなわけさ。ま、わるく思わないでくれ。」

と老人はいいわけをしてあやまりました。そして、仔牛はあずかつておくことにして、下男に物置の方へつれていかせました。

「旅で、みなさんお疲れじやろ、わしはいまいい酒をひとびん西の館の太郎どんからもらったので、月を見ながら縁側でやろうとしていたのじゃ。いいとこへみなさんこられた。ひとつつきあいなされ。」

ひとの善い老人はそういつて、五人の盗人を縁側につれていききました。

そこで酒をのみはじめましたが、五人の盗人と一人の村役人はすっかり、くつろいで、十年もまえからの知り合いのように、ゆかいに笑ったり話したりしたのであります。するとまた、盗人のかしらはじぶんの眼が涙をこぼしていることに気がつきました。

それを見た老人の役人は、

「おまえさんは泣き上戸と見える。わしは笑い上戸で、泣いている人を見るとよけい笑えて来る。どうか悪く思わんでくださいや、笑うから。」

といつて、口をあけて笑うのでした。

「いや、この、涙というやつは、まことにとめどなく出るものだね。」
 とかしらは、眼をしばたきながらいきました。

それから五人の盗人は、お礼をいつて村役人の家を出ました。

門を出て、柿の木のそばまで来ると、何か思い出したように、かしらが立ちどまりまし

た。

「かしら、何か忘れものでもしましたか。」

と鮑太郎がききました。

「うむ、忘れもんがある。おまえらも、いつしよにもういつペン来い。」

といつて、かしらは弟子をつれて、また役人の家にはいつていききました。

「御老人。」

とかしらは縁側に手をついていいました。

「何だね、しんみりと。泣き上戸のおくの手が出るかな。ははは。」

と老人は笑いました。

「わしらはじつは盗人です。わしがかしらでこれらは弟子です。」

それをきくと老人は眼をまるくしました。

「いや、びつくりなさるのはごもつともです。わしはこんなことを白状するつもりじ

やありませんでした。しかし御老人が心のよいお方で、わしらをまっとうな人間のよ

うに信じていて下さるのを見ては、わしはもう御老人をあざむいていることができなく

なりました。」

そういつて盗人ぬすびとのかしらは今までして来たわるいことをみな白状はくじようしてしまいました。そしておしまいに、

「だが、これらは、昨日きのうわしの弟子でしになったばかりで、まだ何も悪いなにわることはしておりません。お慈悲じひで、どうぞ、これらだけは許ゆるしてやって下さい。」
 といいました。

次つぎの朝あさ、花はなのき村むらから、釜師かましと錠前屋じようまえやと大工だいくと角兵五かくべえ獅子ししとが、それぞれべつの方ほうへ出でていきました。四人にんはうつむきがちに、歩あいていきました。かれらはかしらのことを考かんがえていました。よいかしらであつたと思おもつておりました。よいかしらだから、最後さいごにかしらが「盗人ぬすびとにはもうけつしてなるな。」といったことばを、守まもらなければならぬと思おもつておりました。

角兵五かくべえは川かわのふちの草くさの中から笛ふえを拾ひろつてヒヤラヒヤラと鳴ならしていきました。

四

こうして五人の盗人は、改心したのでしたが、そのもとなつたあの子供はいったい誰だつたのでしょうか。花のき村の人々は、村を盗人の難から救つてくれた、その子供を探して見たのですが、けつきよくわからなくて、ついには、こういうことにきまりました、——それは、土橋のたもとにむかしからある小さい地藏さんだろう。草鞋をはいていたというのがしようこである。なぜなら、どういふわけか、この地藏さんには村人たちがよく草鞋をあげるので、ちようどその日も新しい小さい草鞋が地藏さんの足もとにあげられてあつたのである。——というのでした。

地藏さんが草鞋をはいて歩いたというのは不思議なことですが、世の中にはこれくらい不思議があつてもよいと思われます。それに、これはもうむかしのことなのですから、どうだつて、いいわけです。でもこれかもしほんとうだつたとすれば、花のき村の人々がみな心の善い人々だつたので、地藏さんが盗人から救つてくれたのです。そうならば、また、村というものは、心のよい人々が住まねばならぬということにもなるのであります。

青空文庫情報

底本：「いんぎつね・夕鶴 少年少女日本文学館第十五巻」講談社

1986（昭和61）年4月18日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第13刷発行

初出：「花のき村と盗人たち」帝国教育会出版部

1943（昭和18）年9月30日

入力：田浦亜矢子

校正：もりみつじゅんじ

1999年10月25日公開

2012年5月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花のき村と盗人たち

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>